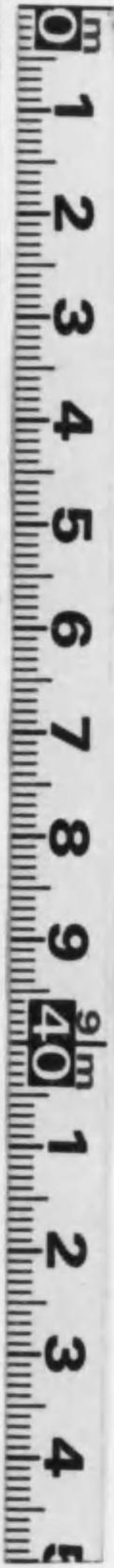


特 245
662

學
講
述

朝
日
文
庫

師
子
王
文
庫



始



特 245

662

學
講
述

朝
日
文
庫

師
子
王
文
庫

特245
662



朝
日
か
げ

田中智學講述

師子王
文庫



國も恢弘、法も恢弘、事も恢弘、恢弘に依ッ
て總べては進歩し遂に成就す。況や其の正し
く純なるもの、意義因縁の重大性あるもの
や、恢弘せてやは、恢弘せてやは、何の躊躇
することかあらん、何の逡巡あることかあら
ん。一言して序に代ふ。(講者)

(筆の中辱後病者講)

更初壽年

昭和九年三月六日

可和起書日

筆

子文



生先中田の前直病發



氏諸事幹會國思法知は方後



衆聽の餘千二堂滿るせ聽謹

朝日かけ

〔一〕朝日講堂の病變に就いて

此の「朝日かけ」と題する冊子は、予が昭和九年二月十六日、朝日講堂に於て、知法思國會の講演に臨み、

「文化的恢弘と日蓮主義」

の題下に、一時間半ばかり講演して、將に講を了らんとする刹那、突如病によつて、講壇に卒倒し、最後の言を言残したまふ、一場の騒ぎを演じ、知法思國會の人々及び當日の講師小笠原子爵、四王天中將、その他の人々に迷惑をかけ、同會の幹部諸君及び予が同志幾百人の驚きと惶惑との中に、約二十分間意識閉塞のまゝ、醫師看護婦の適法なる手當を受け、純信同志の手厚い介抱により、夢の覺めたる如く、朦朧と意識を回復し、氣がついて見れば、大勢の人々が、右往左往に狂奔し、遠くにも近くにも息を飲むやうな唱題の聲が

聞こえたるに心づき、何事が起つたかと怪しみつゝ、僅かに自身が衆人の圍める中に仰臥しつゝあることをさとり、漸くにこれ或は病に因つて倒れたるものなるやを疑ひ出し、さしては結論を了つて退壇し、途中廊下にも倒れたのかとも思ひ、靜かに考へて見たが、其覺えが無い、講演中如何にも苦しくなつて、どうしても聲が出ないから、此は變だと感じ、最早や論旨も了らんとした事故、最後の結論を述べて、少しも早く退壇し、應急の手當をするに如かずと考へ、自ら論稿を巻き收め、最後の語にうつらんとして、どうしても聲が自由に出ず、此では人に聞こえまいとあせつて居る中、どうしたのかその後覺えが無い、すると結論退壇に至らざるうちに、演壇に卒倒したものかと思ひ、其にしても廊下に倒れるとは、太だ不手ぎはな事だと考へて、よくよくあたりを見ると、左りの肩の處に看護婦が一人居て、しきりとカンフル注射のやうなものを行つて居る、右の方に醫者らしい人が脈を按じて居る、如何にも多數人の憂愁に閉ざされた、當惑ぶりが段々夜をあける様にかつて来て、始めて自己の病變が重大なる事を覺つたので、試みに聲を出して尋ねようと思つても、どうしても聲が出ない、そのうちにポチ／＼と側に居る人がわかりかけて来た

ので、此は紛れもなく卒倒より回復したものだとは知つたが、實は時間も場所も明了に心に浮かんで來ない、此が最初の覺醒であつた。そのうちに、左りの手を握つて居るものが芳谷である事が知れた、ついて全身に非常に汗の出る事を知り、其を保坂が扇あふいて居る事が知れた、其から目が悪いがポツ／＼人の誰なるか、段々わかりかけて来た、聞いて見ようと思つても、どうしてもまだ聲が出ない、目は無論ハッキリしないが、比較的耳が聞こえる、さうすると、どこかで知法思國會の幹部の人が、何か報告して居る聲が聞こえる、其から小笠原子爵が登壇して、講演を始めたのが聞こえ出した、小笠原子爵は、予が卒倒を法の爲めに身を惜まない實例だと語つて、不惜身命の活手本くわてほんを諸君の面前に實現したものだといふ意味の事をのべて、大勢の聴衆が共鳴して居たのが耳に這入つた、此の間の時間が、長いのか短いのかよくわからない、事の様を案ずるに、身のまはりにかく多數の人がつめかけて居るのを見ると、事態太だ容易で無かつたものゝやうに思はれ出した、そこで何よりも氣になるのが、どうしても廊下で倒れたものゝ様に考へられてならない、何とかして早く近間の泰文社にでも引取りたいと思つて、よくよくあたりを見ると、金屏

風が立て列ねてある、どうも廊下に金屏風とは可笑いと思ひ出した、或は予が臨終だと思つて、柴田君が金屏風を著つたのかとも思つたが、其金屏風の前にも、人が大分集つて居る、さうかうするうちに、身體が非常に冷えた様に感じた、始めて左の手を自ら腰のあたりに當て、さぐつて見ると、下が板の間であるのに氣がついた、座蒲團の様なものがあるのだが、腰の處にそれがない、此はたまらないと思つて、ヤツと聲を出して、此んな處にいつ迄も居てはこまるから、自働車をよべといつたが、よく聲が出ない、それから氣をつけて見ると、鶯塚夫人が、両手をその板の間へさしいれて、座蒲團代りに身を支へてゐるのに心づいた、次に河野桐谷が、しきりに藤井療器で頸部を推して居る様子だ、恐らくその効果かと思はれる頃に、非常に吐き氣を催して、シタ、カ吐逆して、器も間に合はないらしい、側の醫者がハンケチでもタオルでもと言つて、それへ大分澤山に吐いた、其から追々意識がハッキリしかけて来て微に口が利け出して、二三人の名を呼んで、その居るか居ないかを試みて、フト胸にうかんだのが、論稿を途中に落したかと思ひ、始めて其を尋ねた、其は速記者に渡す必要上、まき收めたものであるから、聞いたら武智漣光が始末

してありますと答へた、其ては宜しいから其を速記者の翻譯の參考に渡せと吩咐けた事を覚えて居る、其から盛んに河野桐谷が此處を先途と藤井療器を頸部及頭部に推して居るうちに、第二の嘔逆が来て、又々先程では無いが残物を吐いた、側の人が、吐物が全然不消化だといつて居たのが耳に這入る、實は其は朝飯である、其後食事をせずに登壇したのである、かくて漸々意識が明瞭になつて来て、身邊の事が氣になりかけて、どうしても廊下に永く横はつて居ては困ると思ひ出したので、今度は聲を出して車を呼んだ、どうも人の耳に聞こえないやうであつた、其の内に「私がかかりますか」といつておそろしい大きな顔を目の前に出したものがある、其を見ると佐多博士であつた、誰か呼びにやつたなと思つて、その診察にまかせた、處が、枕のしやうが可かぬと言つてなほし、氷を頭に當てる、姿勢を直すなど言つて、また一騒ぎやり出した、こちらは委細かまはず、板の間は困ると苦情をいつたので、誰か、何處からか蒲團を持つて来て敷いてくれた、それでもまだ廊下に臥てゐるのだと思つて居た、處が、後で聞いて見ると、其は廊下でなくて、講壇であつて、自分が仰臥して居た處が式場の御聖影前であるといふ事が知れたので、其て金屏風の

謂はれがヤツとわかつた、して見ると、御聖影の前で倒れて、同時に意識を復活したのである、何といふ果報な事だらう、其は可いが、次の講演をする人こそ迷惑、予の事變によつて、講演壇上は全部予に占領せられ、肝心の講師は幕外で講演された事になる、小笠原子爵も爾うである、四王天中將も爾うである、さしも立派に飾り立ツた降誕會式場の大講演は、予の病變の爲に蹂躪されたと見る時は、御聖影に對し、又知法思國會に對し、何とも以て相濟まざる事であると、非常に恐懼したが、予に取りては、大聖人の法義を宣説して、聲と息の限りまで述べつゞけて、法壇に倒れ、而して聖影の御前に假死状態の身を横たへ、場の内外から起る、振り絞るやうな唱題の聲を聞いて、御聖影の前に、自覺を取返し、名醫的確なる診断、同志の懇篤なる看護によつて、刻々に平常に復した事を思へば、御聖影の前に蘇生したも同様、而もそれが二月十六日御聖誕の式日で、知法思國會の尊く清き集りに、現代應時の大法門を宣説して、聲息の限りをつくして倒れた、その病變の蘇生であるとするれば、自身の上からいふと、又しても爲し得ない一生の大記録である、しかのみならず、此の日は吾が懸命の事業たる、大法宣揚の新事業「日蓮主義新講座」の開講の日

である、その登壇の少し前に、小笠原子爵に國家の重大事について、極めて神聖な協議を遂げて、其の快諾を得たのである、此の如く、日といひ、處といひ、事象因縁、悉く具備して、病災とは言へ、即施即廢の格で、死んだと思つたのが、直いきかへつたといふ事は、何といつても芽出度と言はなければならない、其が御聖影の前であつた事實だ、知法思國會や、當日の講師諸君には太だ御氣の毒であつたが、予に取つては、其の式場講壇のすべてを此の事件で占領した事は、復活した後から見れば、凱旋將軍の如く、自ら窃かに祝福する次第である

そも／＼予が脳病たるや、昭和四年大阪で卒倒してより、今度が三度目である、大學醫長楠本博士の説によると、二度目は非常な危険である、それが昭和五年十月、一之江で卒倒した時は、わづかに講演を了つて退壇して卒倒した時は人事不省十五分間、今度は三度目、此は講演を了らんとして倒れ、意識を失つた事約二十分、かく晴ヶ間敷式場の御聖影前に於て、倒れかつ起たのである、俗に『三度の神は正直』といふから、今度は丈夫になるかも知れない、爾すれば、此處で新しく壽命を得たのである、御聖影前に於ける此の事件は

大聖人から新しく壽命を頂いたも同様である、即ち經文に所謂「更賜壽命」の場である。さういふわけであるから、此の講演は、太だ蕪雜粗笨極まつたものだが、(病體で聲が自由にならない爲に)發音言語意の如くならずして、遺憾少からず感じつゝ講じたのであるが、事と場合が此ういふわけだから、予に取つては、一生涯中の最も特筆すべき記録であると思つて、速記者の記録のまま、當時の言語を一字一句も改めず、記念の爲め、之を後世に残さうと思立つて、此の蘇生に等しき事實に徴し、場處が朝日講堂であつたから、當日の良好なる因縁を思ひ合はせて、人々の恩恵同情に感謝し、そのまゝ、「朝日かげ」と名づけて、此の記録を添へ、次に當日の講演速記を公にし、問病の好意に酬い、自身の慶びをも記念しようと思ふのである。

昭和九年三月三日

退院後の病床に於て口述す

田 中 智 學

筆受 長瀧 智 大

〔二本講〕 文化的恢弘と日蓮主義

田 中 智 學 先生講述

石川 隆一・武智 澁光 速記

チヨット身體の都合で、先に御免を蒙ることにお許しを得ました、「文化的恢弘と日蓮主義」といふ題を掲げましたが、實は「文化恢弘」と言つた方がよかつた、話をする都合では或は「文化恢弘」といふ言葉を用ひるかも知れませんが、意味は異つたことではないのであります。

これは何の必要でこの話をするかといふと、元來宗教といふものは國家を超越したものである、斯ういふ考へが廣く行はれてゐる、宗教は直に人類に直面するものであつて、國家といふことに關係してはならぬものであるかの如くに考へて居る向がある、然るに日蓮主義に於ては、開祖日蓮大聖人をはじめ、今日に至るまでも盛んに國家といふことを申します、甚だしきに至つては、日蓮主義は即ち國家主義であるとさへいふ者もするのであります、日本の佛教の中には全く國家に關係のない考へで出

來た宗門もあり、又それを言ッてはならぬと考へてゐる宗門もあるその中に、誤ッて國家主義と考へられるほど國家といふことを盛んに唱へて居る日蓮主義は、勢ひ國家との關係を明瞭にして置かんければならぬ立場に在る。

そこで今は、宗教と國家の關係といふことに就て詳しく申述べて居る時間がありませんから、大要を摘んで言ひますが、その關係は一體どうなるのであるか、即ち國家を超越したといふ考へと、それから國家と一致するといふ考へと、先づ二つあるとする。

國家を超越するといふ方の宗教は、これは國家以外に立ッて居る雲邊遠く天の上に在る教であッて吾々地上の人間には即常用に立たない、所謂理想的の宗教は理想も用に立たぬことはないが、スグの間に合はぬ、吾々の生活は現實である、その現實を現實の儘にして放任して置くか、その現實を活用するとか指導するとかいふところの力があるか、この二つが問題である。

そこで先づ超國家の宗教、即ち國家に頓着のないといふ宗教、それは、人間でさへあればみな宗教の相手である、日本人が日本を忘れて外國を崇敬して居ようとも、人間としての能事が了ればそれでいい、その一事を完うさへすれば宗教の役目は済む、斯ういふ理窟になる。

それは國家を超越するといふことは、日蓮主義の建前に於ても一應これを是認しなければならぬ道

理がある、何となれば、その國家といふものは、一般に考へて居る國家ならば一度超越しなければダメだ、チョウド大掃除をするやうなものだ、大掃除をするには、一ペン荷物を片づけたり人間が出たりして綺麗にして、それから後で内へ入ッて來なければならぬ、さういふ意味に於ては一度國家を超越しなければならぬ、しかしながら、宗教の立脚地が國家を超越したからといって、國家の興廢存亡には我關せず焉といふことになる、まるで國家と絶縁したものになる、それは日蓮主義に於て採らない所である、であるから日蓮主義の謂ふ國家といふのは、一般に考へて居る國家のことではない、日蓮主義の深義解釋を用ひて考へる國家を、眞の國家とするのである。

それからモウ一つは、國家を超越するといふ考へでなく、まア日本に出來た宗教で、日本に居て弘めてゐることだから、日本の國の世話を焼かなければなるまい、義務としても、この國を保護するといふ一面の作用を爲さずには居られまい、斯ういふ考へから、愛國とか護國とかいふことを言出す、これは國家を超越する教理を有ッて居ッて、まア一段調子を下げて國家に附合ふといふ、チョウド譬へて見ると、辨天さまとか稻荷さまとかいふ流行神の境内に店を出す縁日商人が、別段に稻荷さまや辨天さまに自分は信仰も關係もないけれど、店を出す手前、まア打ちやツても置けないからといふので役割から促されて厭々ながら蠟燭代を納める、斯ういふ形なんだ、これは蠟燭代宗教だ、これを私は

假に國家に寄生して居る宗教と呼ぶ、寄生するものには蟲もあるから、よほど警戒を要する。

それでは日蓮主義の所謂國家はどんな國家であるか、これは國家を超越する意味の國家観でない、國家を超越する場合の國家は、先づ選び捨てられる國家と見なければならぬ、それから今の國家に寄生して居るといふのは、これは居候の方の宗教だから、居候を以て甘んずる譯にはいかなう道理がある、ぢやア何だといふと、日蓮主義の國家に於けるや、超國家でなくして融國家である、即ち國家に融するのである、又國家を融するのである、無理にくつつけるのではない、合流とか一致とか言つて變つたものと變つたものを持つて來てひつつけるのではない、精神的に冥合して互に相照し互に相うごく、所謂術語で「俱體俱用」といふ、これが日蓮主義でいふ國家ナンだ。

その國家を融する建前から見る國家については、宗教としてどんな役割をもつかといふと國家に入眼する、居候するのでなくして神カミを入れるといふ運動を執るのである、これは法華經の法門では本門の十妙の中に本國土妙といふ法門がある、これは釋尊の妙覺の見地をもつて觀た國土を言ふのである、その儘にして見れば汚雜充滿のきたない國土である、けれども「一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛」と、佛知見をもつて觀るときには、そのきたないものや不都合なものがみな轉化して立派なものになる、「衆生劫盡キテ大火ニ燒カル、ト見ル時モ我ガ此ノ土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿セリ」といふ境界

になる、ものは一つものだけでも佛知見を以て照せばさうなる。

この原理は何から來ると申すと法華經の實相觀、即ち一念三千の道理から成立して來る、それを現實の上にマザー／＼と實現して行くといふことが、日蓮主義の國家に對する目的であります、それが今の融通するで、法華經の道理と國家の存在と一つにならなければならぬ、無理に説明の力で能書を作つたんではいけない、實際に融即しなければいけない、それは原理の上に於て融即しなければならぬ、この事は、日本國體の原理が直ちに法華經の一念三千の道理を包含して居るといふことは、少し幽玄にわたるから短時間で話は出來ませんが、日蓮主義で申す日本國體の開顯といふのはそれである、直接に法華經の道理を説いて直ちに信ずることの出來ない者があつた場合には、「如來ノ餘ノ深法ノ中ニ於テ示教利喜スベシ」と釋尊は總付囑の中に於て言はれてある、即ち常識の分域に立入つても、これを法華經の大力用を以つて入眼開會して、ことごとく皆法華經たらしめてしまへといふ、この原理と佛勅とによつて、日蓮聖人は日本に出現せられて、そも／＼初めから國家を目的として立たれた、それが事の一念三千といふことである。

只今管長現下がお讀みになつた慶讚辭の中に、承久亂のことがあつたが、日蓮聖人は、承久四年の二月十六日に御誕生になつた、あの國家空前の大變は承久三年の七月に行はれた、陪臣國命を執るさ

へ不祥であるとしてあるのに、その陪臣北條義時父子は、十一萬の大軍を以て明かに帝王の軍に反抗したのである、天軍に抗したといふのは實に容易ならぬ事であるのみならず、その戦争勝利に及ぶやほとんど責を御一身にお引きになつて出家入道して詫びさせ給へる。後鳥羽上皇をも假借する所なく、これを隱岐の島にお流し申した、そのお子様の順徳天皇は英邁の方であるからといふので、これを佐渡へお流し申した、最も不思議なのは、この承久亂の謀議に與らなかつた。土御門上皇までもお流し申した、もつとも初めはお流し申さぬといふことであつたが、土御門上皇御みづから、朕も流せ父君が遠島に流され、弟が遠島に流されて居るのに、朕のみ一人都に晏然として居るに忍びないから朕も同様流して呉れるといふ御催促である、それには及びませんと申上げたけれども、どうしても御聽容がない、強つてといふので、已むことを得ず土佐へお流し申した、島流しの催促だ、十善萬乗の君から陪臣に向つて斯うお促しになつた、神武このかた無い話である。

斯くて三院を三島に流し奉つた、鎌倉から軍を差向けて朝廷の軍に反抗するさへ容易ならざる事である、日本開闢以來の大椿事である、その上に十善の帝をば御三方まで島流しにし奉つた、表面は御遷幸を願ふとかいふ文字を用ひてあるけれども、僅か十人かそこらの供人を供し參らせて朝夕も非常な御不自由、嚴重な監視の下に憂き年月を島守としてお送りになつたといふ、この記録を讀んで泣か

ざる者は實に人臣にあらざるクラキな慘虐を、萬乗の至尊に加へ奉つたといふことは、これは日本の身代限りだ。(以上石川氏警記以下瀧光警記)

何故ならば、日本の天子は皇統連綿で尊いといふばかりではない、國家のあらゆる道德權威事業政治一切の力の源が日本の帝室である、日本はさういふ國柄である、教も帝室から出て居る、然らば帝室は何だ、國民の名譽安樂道德悉く帝室から出て居る國の本だ、その本を廢棄するといふことは即ち國の身代限りだ、それは政治上のことは必ずしも朝廷が其の衝にお立ちにならなくても、臣下でも善い政治を行へば天下は泰平になるなんていふ者もあるが、それは外の國でいふことだ、何であらうとも日本では天子を捨ておいては國を治める源がなくなる、天子は國民の主人であり師匠であり親である、たゞに君臣關係ばかりではない、道統の源は帝室である、その上からは帝室は國民のお師匠様である、又民族關係からいへば大和民族の總本家で親だ、此の主師親、主人なり師匠なり親なりといふ此の三大徳に對する大恩のある天子を島流しにするといふのだから、其の罪は餘程重い、佛教でいふと謗法罪になる、佛の種を炒殺したといふことになる、ところが不思議千萬にも朝野をあげて一人もこの事を論難した者が無い、勤王の本家の如くにいはれて居る北畠親房でさへも、「上の御とがとや申すべき」、朝廷がお悪かつた、それであるから戦に負けた、義時は天下泰平の爲に政治的建前からやッ

たからさう深くとがめんでも宜いと言はんばかりである、一人梅尾の高辨のみがこれを否認した、これは北條泰時の師匠である、泰時が高辨即ち明慧上人にこの意見を求めた時に、とんでもない事をした、此の罪はどうしても消えないと非常に痛歎した、その訓誡を受けて泰時も板ばさみになって困った。

公卿でも武家でも學者でも歴史家でも、此の事に就てあまり深い考察をめぐらして居らないのみならず、佛教は今日と違つて其の時は最も盛んだつた、朝廷から公卿武家すべての者、民間に至る迄も佛教に對する信仰は非常に篤かつた、それ故何事があつても直ぐお寺にかけつけて拜んだ、此の承久亂の時にも關東の軍勢は別段御祈禱もしなかつたけれども、朝廷の方は諸寺諸山に祈りを命じた、天台眞言の高僧名僧鑄を削つて大法秘法を行つて義時を調伏した、然るに祈らんでも伊豆の國の民たる義時が一天萬乗の君を討つたのだから、打ツちやつておいても神様が打ツちやつておく譯がない、そこへ叡山東寺仁和寺其の外の大山及び諸社が肝膽を碎いて祈つた、朝廷を亡ぼす義時を調伏する爲に、朝廷御安全の祈りをしたといふにも拘らず、宇治が破れ瀬田が破れた、僅か半日か一日足らずの中に勝負がついてしまつた、泰時の大軍が伏見から京都に攻め入つた時『ノーマクサンマンダー』と護摩壇で祈つて居たものが、あはて、護摩壇から逃げて行つたといふ、佛法が此の通り盛んであつて、『佛法ハ體ノ如ク世間ハ影ノ如シ』といふ原則からいへば、魂の佛法がそれ程盛んであれば天下の人心は必ずこ

れに歸嚮して居らなければならぬ、其の上に斯ういふ加持の大威力によつて守り、その力が加はつて居るのだから、どうあつても朝廷は御安全で、泰時の軍は宇治川を渡る時あたりにブク／＼やつて流されてしまはなければならなかつた、然るに事は反對だ、其の結果三院は三島に流され給ふた、日本開闢以來未だ曾てない此の大事變を現出した、然るにこれが更に問題にならぬといふことは又もの、不思議だ、斯うまでに精神が痲痺して居るかと思ふ程だ。

そこで日蓮聖人は其の年の翌年二月十六日に御誕生になつた、即ち承久四年の二月十六日に御誕生になつた、その年の四月改元して貞應元年となつた、そこで日蓮聖人はだん／＼物心づいて承久亂のことを親から聞き、或は出はいりする者から聞き、又は世間の噂から聞いて一つの不審を抱いた、これは不思議なことだ、第一天子の力がそんなに衰へて下がそんなに跋扈する、所謂下尅上だ、下として上を凌ぐといふことが行はれた、ところが天には日月があり、三千八百三十餘社の神々が國土を守護するといふ、然るに天下の逆亂は此の通り至つた、これはもの、不思議だ、又佛法の祈りも効かない、諸天善神諸佛菩薩がこれを黙つて見て居ればそれは空ッぽだ、空ッぽならそれを説いた法も反古だ、これは由々しき一大事だ、斯くも弘まつて居る八宗九宗が斯ういふ顛倒を敢てせしめて黙つて居るのはどういふ譯であらうか、それで宜いものであらうか、これには何か仔細があるものであらうか

といふ不審を抱いた。

その不審を晴らす爲めにこれは自分の智慧ではいかんといふので其の疑ひを晴らさんが爲めに佛門に入つたと、日蓮聖人は自ら仰せられてある、出家發心の動機が國家の一大事を決する爲めに佛門に入つたとある、そこで後年日蓮聖人が正法を立てて國を安んずるといふ「立正安國論」を献策する時に、若し國が正法を用ひなければ天地の道理に背反するが故に天軍常にこれを許さん、必ず國に變亂が起る、俺は凡夫であるからどういふことがあるかわからんが、一切經の鏡に照らして見ればよくわかる、それは三災七難が起るとある、飢饉だの疫病だの大風だのといろ／＼な災難が起つて、その次には自界叛逆難他國侵逼難の二難がある、これは即ち戦亂である、國に同士討の戦が起る、さうして萬民塗炭の苦しみをなす、それから次には他國から此の國を攻めて来る、此の二つの難があると經に書いてある、今は未だないけれども今迄の中に五難が起つた、先蹤を以て見れば是は時期の問題で必ず来る、何處までも正法を信せず、正法に手向つて居る間は必ず是が来る、それは經文の鏡にかけてある。

『先難是レ明カナリ、後災何ゾ疑ハン』

といふので、此のことをば最明寺時頼に向つて進言した。

さうしてゐいて十字街頭に立つて此の説を主張し武家や平民に向つても盛んに宣傳されたから、と

うとう問題になつて、結局其の反響として松葉ヶ谷の草庵を焼打された、數千人の大層な群衆が日蓮聖人の住居に押かけて焼打をした、よく交番の焼打なんて事があるが、あれは松葉ヶ谷の焼打が其の元祖かも知れない、ところが焼殺すつもりでやつたがとう／＼焼殺することが出来なかつた、それは火の中に在つて焼殺されなかつたのではない、群衆の押かける少し前に山の上に散歩に行つて居た爲めに留守であつた、間抜けなものがあつたものだ、それを矢ッ張り日蓮聖人は焼き殺されたと思つて居たところが、何時の間にか又大町小町の辻に立つて立正安國論の御説法があつたから、あれは魔法を使ふに相違ない、魔法を使ふとすれば最早群衆の力ではどうにも仕様がなくなつて、始めて政府の威力を以てこれを脅迫することになつたのが伊豆の流罪、翌年弘長元年五月十二日に伊豆の伊東へ流罪となり、三年間伊豆に居られた、其の時の斷獄が何だといふと、坊さんの辯に國家がどうだとか、外國が攻めて來るとかいふのは怪しからんことである、即ち妖言を以て國を惑はすものであるといふので、妖言の罪といふことを以て伊豆に流した、國が危いから大變だといつて用心しろといつて警告した、此の忠言をば、天下を惑はす妖言だといひ、國家がどうの政治がどうのといふのは山師坊主である、怪しからんことであるといつて、とう／＼伊豆に流罪、同じ流罪でも伊豆の流罪は重い方だ、その上は佐渡だ、國家のことをいへば山師である、怪しいものであると言はれた程であるから、日蓮聖人の

國家に對する忠言といふものは實に徹底して居る。

此の知法思國會の知法思國といふ言葉も矢張り聖人のお言葉から出て居る、

「法ヲ知り國ヲ思フノ志シ尤モ賞セラル可キノ處、邪法邪教ノ輩譏奏讒言スルノ間、久シク大忠ヲ懷イテ未ダ微望ヲ達セズ、剩ヘ不快ノ見參ニ入ル」

唯此の國に生れたから祖國愛で國を思ふのではない、法を知り國を思ふ、法を知れば知る程此の國の大事なことを考へる、法を知るの極は正法を立てることだ、國を思ふの極は國を安んずるに至らなければならぬ、そこで知法思國は一轉して事實上にこれが立正安國となつて現はれた、よつて日蓮大聖人は

「一切ノ大事ノ中ニ國ノ亡ブルハ第一ノ大事ナリ」

といはれた、一切の佛教は國が亡びやうが構はん、佛教の大事といへば悟道の問題である、生死の問題である、眞理の問題である、心の問題である、然るに日蓮聖人は一切の大事の中に國の亡びんことが第一の大事だといつた、それから御自分の抱負を語つては、

「日蓮ニヨリテ日本國ノ有無ハ有ルベシ」

といふ、これは一言にしていへば日本の興廢存亡は俺次第だといふ、いきなりこれを聞いたたら、殆んど

誇大妄想狂の言葉のやうにも思ふ者があるだらうが、そこには其の深い理由がある、仔細がある、それは日本國民に投げられた一つの大きな謎である、それから御自分の主張をば

「我日本ノ柱トナラン、我日本ノ眼目トナラン、我日本ノ大船トナラン」

といはれて、悉く日本といふことに終始して居る、又御自分の稱呼には「本朝沙門日蓮」といふ程所謂國家本位の如き建前であつたといふことは、日蓮主義からいふ國家は實に深いものだ、その深い國家觀から來つて居るが故に、此の國家觀たるや實に力が強い、所謂國家主義のやうな片々たる浮いたものではない、本國土妙の國家觀から來つた、これから照して見て日本の國體といふもの、即ち日本の國を先づ打診するんだ、其の心の底から打診して行く、國の歴史や傳統は第二で、國の來歴の源だ、それから打診してかゝるそれが國體だ。

日本を見るのに先づ國體から日本を見る、國相國性から見るのは其の次ぎだ、先づ國體から見る、其の國體とは何ぞや、これは法華經眼を以て見れば諸法實相一念三千の原理が世間の上に現はれたものだ、天照太神の神勅にこれは明記されてある、それは何だ、

「寶祚ノ隆エマサンコト、天壤ト共ニ窮リ無カルベシ」

とある、天地と共に窮りないといふことは人間の中ではないへない、どんな文明でも文化でも富の力で

も決してそれはいへない、天地と共に窮りないといふのは、天地と共に永久なるところの道でなければいへない、其の道を以て心とし體とするところの國であるが故に、此の天津日嗣は天壤無窮である。

此の天壤無窮の何處までも盡きないといふのは未來だ、これを過去にさかのぼっても矢ッ張り同じだ、過去遠遠劫の昔から道は一つだ、昔の太陽は冷たかったが今の太陽は暑いといふことはない、これを法華經には久遠實成と説いてある、久遠の生命とあかしてある、これを世間の言葉で單刀直入に天壤無窮といふ、天壤無窮は即ち久遠實成の大道理を人間の言葉で表したものが天壤無窮だ、これが内面の道である。

それから一念三千の原理は諸法實相である、十箇の法則がある、法華經には十如是が説いてある、如是相から如是報まで九つ、此の九つが始めの起點も終りも必ず一つになつて循環圓滿して行くものであるといふので、最後の打止めが本末究竟して等しきものであるといふ、即ち圓だ、隔歴でない、隔てのない圓だ、それを本末究竟等といふ、日本ではこれを何とあらはしたかといふと、神武天皇が國見の丘にお立ちになつて大和の國狀を憐して、如何にも美しい國であると仰せられた、『美なる哉山河、其の形は蜻蛉の譬喏せるが如し』と仰せられた、蜻蛉とはトンボです、蜻蛉が譬を喏めて居る、此方が頭で此方が譬である、上の方の口が一ばん終ひの譬を喏めて圓い形になつて居る、日本の形を

蜻蛉の譬喏せるが如しと讚美せられた、これは國の形を讚歎したといふ、褒めたとある、そこで古來誤つて蜻蛉の形のやうな國だから秋津洲と日本をいつたといふ、蜻蛉の形だといふのは、それは蛇の形だといふことや鳥の形だといふこと、大して違ひはない、唯さういふ形容だけなら……、然るに此の國を褒めて、『美なる哉山河』といふ中には、即ち精神的の讚美がある、『蜻蛉の譬喏せるが如し』といふことは何であるかといふと、世の中は圓くなるといふことである。

神武天皇即位の始めに世界は一つのものにならなければならぬと御宣言なされた、

『六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サムコト、亦可カラズ乎』

世界中に都は一つ、世界中は一軒の家になる、さうしなければならぬ、然し今すぐにはならない、それをするには

『上ハ則チ乾靈國ヲ授ケタマフノ德ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ、然ル後』

にとある、『然ル後、六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サムコト亦可カラズ乎』、即ち世界統一の大理想を御宣言になつた。

此の世界統一の爲に日本は建てられた、其の爲めに天照太神が皇統を垂れられた、その仕事だ、其の仕事の場所に日本をお撰びになつた、場所があつて仕事がないといふ法はない、であるから日向

の様な邊鄙なところに居ては、世界的活動に不便である、先づ其の仕事の發祥地である日本から先にくすつかり調べなければならぬ、されば東の方に向つて行かう、これも唯方角の爲に大和を撰んだんではない、當時大和には饒速日命が居つて、天上文化を拓いて居る、これも天の神から遣はされて人民の代表として降つたのである、日向に都した瓊々杵尊以後の御歴代は即ち天下の君として遣はされた、であるから、瓊々杵尊には三種の神器をお與へになつた、これは國を司どる三種の神器だ、饒速日命には十種の神寶をお授けになつた、これは民の産業を表する、然し民ばかりでこれを統轄する君が行かなければ君臣一體の事業が興らぬ、その爲に朕は大和へ移動すると 神武天皇は仰しやつた、唯だん／＼東征して見て大和がよかつたから、こゝに都したと考へたら大變な違ひだ、東征といふけれども實は日向から大和に都をお遷しになつた御遷都だ、斯ういふ意味があつてお出でになつた 神武天皇だから、今蜻蛉の譬帖せるを御覽になつてこれを美なりとし、世界はすべて一つになる、蜻蛉の頭と譬とが一つになつて圓くなるやうに、世界は圓くなると本末究竟等の相を讚歎せられた、法華經の原理の通りである。

それからもう一つは、神武天皇が此の國を開創なされたといふが、實は 天照太神がお開きになつた國なんだ、けれども、政治の上に國の組織を成したのは 神武天皇から始まる、そこで 神武天

皇の紀元を日本の紀元とするが、實は天壤無窮だから、さかのぼれば天祖の昔から皇統連綿である、それは何の必要であるかといふと、此の日本の目的が今いふ通り世界統一といふことにある、然るにそれ／＼民族や國家の上に利害の關係が異つて、年中其の衝突の爲に世が不安であるといふことは、人類の恥辱である、かるが故にこれをなくさなければならぬ、是をなくすには一つの標準を立てなければならぬ、その標準を定めてこれを弘めることが、やがて人類の争ひをなくす根元である、及に勵まずして天下を平らげんといふ、武力旺盛の神様である、神武天皇が及に勵まずして天下を平らげんといふ、それは何であるかといふと、此の國體の道を以て一切の人類の標準とするやうにして、人類は善を同じうする、天下は一軒の家になる、此の大理想の爲に此の國を經營せられたんだ、であるから本末究竟等、六合を兼ねて都を開き八紘を掩うて宇となす、都は天下の政治をとるところだ、政治は一ヶ所から出なければならぬ、今國際聯盟があつて利口な人が大勢寄つて居る、なか／＼議論は立派だけれども、其の立派な議論が出る度に世の中が騒々しくなる、學問も智慧もある人達だが、さういふ者が寄つて集つて口を酸っぱくして天下を騒がして居る、それは天下が善を一つにすることを知らぬからである、自由だの博愛だの平等だのといふ賈金を使つて居るからである。

日本古來の傳統の國體精神、神武天皇によつてこれを三つにお分けになつた、慶を積み暉を重ね

正を養ふ、慶を積むとは即ち仁徳である、愛の源頭である、暉を重ねるとは所謂分別の正しい一點の曇りのない文化の源である、それを重暉といふ、正を養ふとは正義を保護する、これは正義にそむいたものは武力を以てこれを退治しなければならぬ、武勇の徳だ、即ち仁の徳と智慧の徳と武勇の徳と三つだ、それを 神武天皇は積慶重暉養正と仰しやツた、これが日本の國體の内容だ、これを標準として人類を治める、さうすれば人類は救はれる、然るに今の世界には標準がない、唯己の懐中勘定や手前勝手を標準として居るから、打ツちやツておいても争ひが起る、争ひの起るところに平和のある譯はない、であるから「疆ヲ分チテ用テ相凌轢ス」と嘆かれた、村なら村國なら國、各々國家や民族が別々の見地に立ツて利害の衝突の爲めに年中争ツて居るといふ状態を根本から匡さなければならぬ、これが 天祖皇太神の御思召である、その御思召の爲めに此の國を建ツた、その御心を繼いで今こゝに朕は日本天皇の位に即く、さうして文武の政事をこれから開くと仰せられ、今の六合一都八紘一宇といふ大見地に立たれた、これを約して人類同善世界一家といふ、人類は一つの善に集り世界は一つの家となるといふ、 明治天皇はこれを御製にせられて、

よもの海みなはらからと思ふ世に

など波風のたちさわぐらむ

と仰しやツた、それは 神武天皇の四海一家の道理を御諷詠遊ばされたものである、これが日本の精神だ。

今日本精神といふ事を頻りに言ひ出すやうになツたのは結構だ、結構な事だが何が日本であり、何が日本精神であるか、其の源を考へなければ空々漠々唯日本々々といつても、それは唯親分の寵だ、日本人だから日本を最良にするといふだけならそれは親分の寵だ、そこで先づ國を二つに分ける、道義によツて建てた國を道義國、生活の勝手によツて建ツた國、情實だけで作ツた國を情實國といふ、假の名前だがさういふ戒名を作ツておかんと、引導を渡す時に困る、民族關係や利害關係や經濟關係で出来た國は、それは皆情實國だ、何か一つの道義上の目的で出来た國なんて洒落た國は、世界中一つもない、今度滿洲國が出来たが、あれは日本國體の出店だ、日本は道義國である、だから國の前に主義がある、日本といふ國家を建てる前に、其の國家を建てる主義があつて、其の主義の通り建てたんだ、それでは其の事業は何だといふと、世界中の人類に此の公明正大の天地の公道を知らしめ、残らずみんな其の心にさせて、すべての者を正しくして世に間違ひのないやうにする、惑ひのないやうにする、怖れも不安もないやうにする、さうすれば頼んで歩いても戦争はない、戦争すれば危険だ、戦争ほど危険なものはない、誰が好んであんなことをするものはない、不埒なものがあるから已むを得ず戦争する、けれ

ども日本以外の國の戦争はみんな自分の利益の爲めにする、日本の戦争はさうでない。

滿洲事變の時によく權益の保護といふことを言つたが、權益の保護といふのは眞に私は厭だ、正義保護の爲めと何故いはない、明治天皇の御思召は正義だ、人類の平和の爲めにと仰せられた、それは明治天皇ばかりでなく御先祖の神武天皇がさう仰せられて居るではないか、これのつながつて來た國なんだ、であるから今日の國家といふことを考へるのも、それを考へなければならぬ、國際聯盟の先生が考へて居るやうなものと御多分にもれませんが、日蓮聖人は國家でも正義にそむき眞理にそむいた國家なら、亡びた方がいゝといはれた、これ位痛切な愛國の言葉はあるまい、亡びてもいゝなんて怪しからんといふ周章者があるかも知れないが、日本が若し正義にそむいたら無用の存在だ、それは一日も早く亡びんことを天に向つて懇へるといふ、だから其の裏には日本はもと眞理の國だ、正義の國だ、御先祖が天照太神、天照太神は久遠實成の釋尊である、久遠實成の釋尊のお生れ代りであると日蓮聖人は喝破した、神武天皇さへも日蓮聖人は法華經の行者なりと仰しやつた、それは神武天皇が法華經を讀んだといふことも身延にお詣りに行つたといふこともないが、其の内徳を讀し其の因縁を讀して法華經の行者なりといはれた、法華經の提婆品に日本の神代の卷を接合して論ぜられた。

道義國日本、不思議の國日本、それが不思議のない國と今對抗して居る、丁度醫者が氣狂ひの病人を預つたやうなものだ、其の道義國の日本は道義性の本能として、必ず其の道義を封じ込めておくものでなくして弘むべきものである、まして人情の必然として、食べて甘いと思ふと、これは甘い誰かに食はせたいとなる、尤も甘いから人に食はせないで自分ばかり食はうといふ者もあるが、それは人間の落第だ、まして佛の心神の心を以て、此の眞理を體達して得たものは、人を皆この通りにさせたと思ふわけだ、であるから道義性の日本は、必ずこれを弘めようといふ考へが起らなければならぬ、これを人類に廣く及ぼさなければならぬ、それが恢弘といふことだ、これは神武天皇の御言葉だ、

『天業ヲ恢弘シ天下ニ光宅ス』

と仰しやつた勅語だ。

恢は大いにするで恢張の義、弘は弘布でひろめる、日本の出來たのは日本民族の幸福の爲めに此の山河を所有して、世の中が富さへすればそれで國民安全だといふやうな意味で此の國は成立したのではない、人類のすべてを此の正義大道によらしめようといふ目的で出來た國であるとすれば、勢ひこれを擴張しなければならぬ、弘めなければならぬ、即ち天業を恢弘し天下に光宅する、日本は道義國であると同時に恢弘國である、然るに今日までの日本人は未だ弘めるところまで行かなかつた、

維新以後の日本は先づつとめて外國の文明を學ぶといふことに汲々として居った、學ぶの極は模倣になる、我を忘れて性根を抜かれたやうになつた、然しこれは一時の病的現象だ、病的現象だから又本へ復る、兎に角弘めなければならぬ、弘めるにはどうする、それにはいろ／＼弘め方があるが、恢弘といふことを考へないで日本の國家を知ることが出来ない、如何となれば、日本は日本の爲めに建つた國でなく、世界人類の爲めに建つた國だといふ 神武天皇の御思召を奉戴して、何千年の今日まで持續し、將來も益々此の國運を恢弘して行かなければならぬ國の運命である、さすれば當然道義國の本能として恢弘性を有たなければならぬ、其の恢弘といふことについて、弘めるといふことについて二通りある、一つは實力恢弘である、實方の恢弘とはいろ／＼あるけれども、政治外交も實力の中にはいる、經濟も實力の中にはいる、けれどもまさ／＼しい實力といふものは産業だ、それから其の次ぎには武力だ、産業と武力だ、武力は萬已むを得ない時に恢弘的に用ひる、用ひない時は内にひそんで國を護る、即ち國防だ、産業は如何なる場合でも國家の産を興してもらはなければならぬ、富を増進してもらはなければならぬ。

幸ひに日本の軍隊は昔から正義の觀念が充實して居る、これは一つは統制上 天皇陛下に直屬するといふことの爲めに、その教育は單刀直入に國家の重きを以て任ずるといふ教養をする、であるからいろ／＼民間の攪亂混淆の中に立って、軍人が一ばん正しい國家觀念をもつて居る、これが又違つた考へを持たれたらたまらない、此の間私は或るものに書いたが、日本の軍人が政治に關係してはいかんといふことは何故であるかといふと、軍人は兇器を持つて居る、だから危険だといふ、爆彈や刀を持つて居る者が政治に携はるのは危険だとの理由で、現役軍人は政治に關係してはいかんといふ、これは情ない話だ、日本の軍人は精神病者であるといふことだ、昔から刃物を持たせると危険だといふのは氣狂ひか子供に限る、日本の軍人が氣狂ひだといふ診斷を受けて黙つて居るといふのは随分だ、さういふ頓珍漢なことをいつて居る、それは 上御一人ましまして此の軍事の大綱を統べさせ給ふ以上其の劍戟でも銃砲でも皆悉く正義の力がこもつて居る、それは何卒御安心下さい、一體いふと軍備縮小はまだるい、軍備全廢でなければならぬ、さうして平和を亂すものがあつたら國際軍を以て、それを全部制裁しなければならぬ、日本の軍人は公明正大だから世界の取締りに日本の軍人を以て當つてもらふ、然らば列國の軍備がなくなるから、その十分の一位の費用を日本に納める、さういふ時が必ず来る、軍備縮小を進めて行つたら緋緘の鎧を着て戦争するやうになる。

此の實力恢弘の中武を用ひるといふことは、萬已むを得ない時のことだ、神功皇后が三韓征伐に依りてになつた時には、お腹の中に 應神天皇がおいでになり、親ら三軍の將として三韓を征伐なされ

た、さうして三韓が降伏した時イッそ斬ッてしまはうといふ者があつたが、神功皇后は何と仰せられた、『降を斬るは不祥なり』降参したらそれで宜しいといふ、堂々たるものではないか、それが日本軍なんだ、秀吉が朝鮮征伐をしたのは少し脱線して居つたが、あれは終ひまでやれば日本軍的の行動を以て 神武天皇の大理想を自然天然に現はすに違ひないと私は思ふ。

それからもう一つの方面は何だ、もう一つの方面は文化恢弘だ、これは實力の方でなく文化だ、文化は精神的である、此の二つの分け方は私のこれは判断ではない、聖徳太子のお説に力に二つあり、一つは道力一つは勢力だと仰せられた、これは勝鬘經といふお經の力といふ言葉に聖徳太子が御解釋なさる時に、斯ういふ御解釋を用ひられた、『力に二あり一には道力二には勢力なり』、道力は道徳の力である、勢力は仕事の力である、今私がいふ實力恢弘といふのは勢力だ、それから文化といふのは道力だ、然しこれには屬性がある、まアざつとあげてみるとこゝに五つある、政治が一つ、學問が一つ、道徳が一つ、藝術が一つ、それから宗教と此の五つは文化恢弘になる。

そこで日本の政治は未だ天業恢弘するまでに至つて居らぬ、聯盟脱退の時に松岡君は見榮をきつて日本の精神を説いた、あれだけだ、これからだらうが今までは未だ時節が來ない、學問も今までは西洋の學問を汲々として輸入して居つた、日本の學問を輸出したといふことは餘りない、これからはあ

る、向うから靴を教へたから此方からは草鞋を教へてやるといふやうに……、日本には花には華道、茶には茶道、香を聞くには香道といふものがある、それ位高尚な緻密な文化を有つて居る、藝術の上にもある、今のところでは西洋の眞似ばかりして居る位だから、芝居でも西洋臭くしなければならぬやうだが、音樂でも西洋音樂でなければならぬやうにいふ、日本音樂學校といふ學校で最近まで三味線も雅樂も教へなかつた、唯西洋の音樂ばかりを教へて居つた、日本人には日本人の聲がある、それを封じてしまつて、さうして機械の音に合ふ聲でわざ／＼やらせて豚のしめ殺されるやうな聲を出させる、いくら西洋人が威張つたつて清元や端唄をやつても出來まい、清元や端唄や歌澤なんてものを聴く迄進歩して居らん、今にさういふ時代が必ず來る、物質の學問は今西洋が先輩だが、精神の學問はまるで駄目だ、これからだ、大體日本國體學なんて立派な學問があつて未だ名前さへも知らずに居る、此の頃西洋人の或る人が來て日本の國體を頼りと論じて居る、日本人はそれを聞いて感心して居る、これらはまアだん／＼これからやる、外務省などは西洋の人と交際つて、ダンスをやつたりそんなことばかりを外交だと思つて居る、日本の外務省は日本の文化を彼に示すといふことを先づやらなければならぬ、日本の淨瑠璃や謡曲のやうなものを翻譯して彼等に早くから知らしておいただけでも、國際聯盟の時にあんなへまは起らない。

ところでこれらは日本特有のもので、これらのあらゆる文化を綜合した文化は何であるかといふと宗教だ、宗教が國家に無關係だといふ折紙をつけられた宗教では間に合はない、超國家的宗教でもないし、國家寄生的宗教でもない、これは綜合文化の宗教として七百年前に提供した日本佛教、日本の大精神を宗教化した日蓮主義、それは日本といふ國は恢弘國として世界に弘めなければならぬ運命を有つた國だ、その中にはいつて日本の魂となる法華經はどうかといふと、これも世界中に弘めなければならぬ弘恢性を有つて居る、

『閻浮提ノ中ニ於テ廣宣流布シテ斷絶セシムルコトナカレ』

とある、此の世界の中に廣く布き弘め、斷絶しないやうにしろといふ、即ち『天業ヲ恢弘シ天下ニ光宅ス』と同じ意味である、恢弘國の日本に恢弘教の日蓮主義、それではそれはどういふ工合に出来たか、こゝに於いて日蓮聖人の本門戒壇論があらはれる、世界中を一つにしてさうして一旦日本に集めて、世界中を日本にするといつても奪るのではない、外國人が居たらびっくりするだらうが、此方から開放して世界がみんな日本になるんだ、精神的に先づ世界を日本にする、それは何であるかといふと、積慶重暉養正の三大綱即ち日本國體の此の大目標の下に人類が集れば、歪んだり吠えたり争つたりすることはなくなる、それに強大な力と背景をなすものは法華經で、法華經を以て日本國體に入

眼するといふのは其點だ、魂を入れるんだ、即ち 天祖皇太神の天壤無窮は如來壽量品の如來の常住不滅といふことだ、神武天皇の世界平和の大統一は法華經の本末究竟等である、神武天皇は天業を恢弘し天下に光宅するといはれて恢弘された、『下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ』といふ『天業ヲ恢弘ス』るといふ、天業は天津日嗣の事業である、此の事業をば世界に弘める、法華經は一閻浮提に廣宣流布するとある、廣宣流布教が廣宣流布國に魂を入れたんだ、恢弘國の眼目は恢弘教である。

そこで世界中が日本に歸依して法華經を信仰するやうになれば、世界中が皆日本に向つて歸依する、南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟尼佛と拜んだ、通じて一佛土の如し、これは本門戒壇だ、

『敕宣並ビニ御教書ヲ申シ下シテ、靈山淨土ニ似タラン最勝ノ地ヲ尋ネテ戒壇ヲ建立スベキモノカ、時ヲ待ツ可キノミ、事ノ戒法ト申スハ是レ也、三國並ビニ一閻浮提ノ人、懺悔滅罪ノ戒法ノミナラズ、大梵天王帝釋等モ來下シテ踏ミ給フベキ戒壇也』

(此の時より先生の聲は非常に低くなる)

此の戒壇を 神武天皇は鳥見の丘に靈時といふものを建ててになつた、『マツリノニハ』だ、神武天皇の靈時は即ち日蓮聖人の本門戒壇だ、斯ういふ意味を以て日本の國家は即ち世界統一の大理想を有つて建つた國だ、此大理想は法と國との感應から來たる、これは所謂綜合文化の大集成、本門戒壇

の本國土妙の所顯だ、法華經を現實に現はした所謂文化恢弘の……

(速記者曰く、此の時先生は絶句せられたまゝ暫く立たれて居られ、聴衆は次のお言葉を待って聴覺と視覺とを先生の全身にそゝいで居たが、先生は終に倒れかゝられ、側近の人、辛うじて頤墜を支へたが、終に意識喪失のまま演壇に横臥せしめらるゝに至り、満堂悲痛の光景、唱題の聲處々に起り、衆人入り亂れて、重大病變の状態に入る……)

〔三〕病變後の再起

編者曰、此日講演の重要性に鑑み、知法思國會よりは、かねて先生の講述に經驗ある現代速記の泰斗衆議院速記課の石川一氏を聘し、天葉民報社よりは武智蓮光を出張せしめ、一語も遺漏なく速記せしめたるが、講將さに終らんとする時、先生の聲調一變し音調俄かに硬塞するや、兩手を壇に突いたまゝ無言つゞいて身體轉倒せんとする一刹那、左方に侍座せる令息芳谷氏馳り寄りて身を支え、疾風の如く駆け登つて来た楠村瑞洋氏と共に、後方より抱きかゝえたる時、意識全く絶え居り、スハとばかり會の人隨行の講師、聴衆の甲乙期せずして數十人、先生の身を護して、靜かに演壇に仰臥せしめ、豫備の看護婦醫師等馳けつけてカンフル注射其他の手當を施し、聴衆數千の中よりは、臨終とさへ速断するほどの周章に、ハヤ到る處に悲痛なる唱題の聲處々に起り、幹事は演壇の幕を引き、一時休憩を宣して、非常の難踏を極めたるも、佐多博士の來診によりて手當順當に運び、多量吐逆の後、約二十分後に意識を回復され、一時間後には寢臺に依て數十人に護られつゝ、佐多博士身邊に侍して御入院、通過の際數千の聴衆悉く起立して病體に敬禮する等、光景全く悽慘を極めたるも、入院後經過甚だ良好、數日にして、室町泰文社まで退かれ、三月四日を以て絶對靜安のため駿州原田鑑石園に赴かれたが、岩永博士等數十人車中監護し、無事入園あり、越えて三月十八日、佐多博士の親友なる稻玉信吾博士沼津より來診あり、秋鹿矢田兩國手と共に、周到に病態を檢し、經過良好の旨を以て、一時病床移動の不可なきを認め、廿一日十數人に護られて數日間一之江申孝園に安臥しつゝ、熱誠求道のため四來の篤志青年と伍して法悦を共にすべく東都に向はれ、その前日、看護執事長智大講師に命じて、病病絶言後の本講最後の結論を筆受せしめ、この未曾有の紀念すべき講録を完璧にし四方問病の篤志者に贈り、併せて後代の紀念となせるもの即ち此篇にして、朝日講堂に仆れ朝日講堂御聖影前に蘇したる因縁を以て、先生は此講を生死の境と曰はれ、更賜壽命の牽掣だと稱し、處に因みて自ら「朝日かげ」と題すべきよし申され、全稿と補述とを併せて一篇と爲す、依て速記以後の斷絃を紹ぎ、以下御口授のまゝを謹録す。

(以下先生病中の口述)

此講將さに終らんとする刹那、不甲斐なくも急病で結論の一語を述べ得ずして壇上に倒れて其儘になつたが、トニカク予は聲息の限りを盡して倒れたのだから、武士が戦場の討死にも等しいものとして、我れながら痛快にも感ずるが、法門は私事ではない、特に此日の講は、非常時の覺悟を促すべき日蓮主義の最要義を要説したもので、全く予の發見に屬する一節もある事だから、結論要約の一語を蘇生後の予から加へ足して完稿として置かうとおもふ。

當日の講は、約一時間半ほどで、ほとん論旨を盡くしたのだが、何分にも朝來不例の中を強て聲を振り絞つて、力めて満堂の聴衆に聴取れる様にと努力して話したが、音調言語すでに常を失つて居たのだから流暢快活を缺き、甚だ話しくかつたので、言ふこともときれくになつて、頗る不手際な講話であつたと残念におもつて居る、況んや既に草稿を速記者に渡すべく、みづから捲き収めたまでは覺えて居るが、最後のあいさつも述べ得ずし

てあの始末、何とも以て諸人に申譯がないから、降壇最後の一言を今左に口述して講意を結ぶことにする。

要するに『文化恢弘』は、吾國の使命として残された唯一の國家能力の一つである。

恢弘しないでは居られない筈の國だ、美玉を有するものが價を需つが如く、麗人が伉儷を求むるが如く、弘め擴げて國の本領を世に普及しなければならぬ運命を有つて居る、トいふのは此國の建國主張が元來人類の平和を築くためだからである。恢弘はむしろ第二の本能である。

扱てその恢弘だが、實力でやるのと文化でやるとの二つあることは前に略説したから、要をつまんで概説的に括りをつけよう。

實は實力にも文化が伴ひ、文化にも實力が附隨すること論を待たないが、今假りに一樣にわけて置いて、本題の文化恢弘中尤も中心たる日本の宗教即ち日蓮主義の世界發展を力説する便としよう。

實力恢弘の中には『産業』と『武力』が中心であるが、實は左の二件を實力中より閑却

してはならない。

手工の發展

發明の恢張

日本の特色は手工と發明に在る。國民の手工は天性であり、發明の才も天性であるが、此方は壓しつけられて伸びずに居た、摸倣に長じたといふことが、天然創造の下地であることに氣のつかかなかつた經世家にどの位國運を阻まれたか知れない、手工に至ては萬國無比天下一品、ウソだと思ふなら奈良正倉院へ行つて、あの多くの手藝品を見るが、盛に隋唐の感化を受けたあの時代に在て、あの製品のいかに垢抜けのして居るかを見て、大佛殿の建築殊能と共に、世界に卓絶したものなることを知るがい。第一手工は一人づゝに具つた天能であるから、これを獎勵しきへすれば、人口問題などを頭痛に病むことはない。石炭や金鑛などを富の本體かの如く考へて居るのは、一種の野蠻思想で、人類の恥づべきことだ。これを捨置いて人口問題や失業問題をトヤカク騒ぎ廻はる吾國經世家の智慧のなさには、あきれかへらざるを得ない、次に「武力」だが是れは精神力の發露で、技能程度

の問題ではない、日本の武は一言にして神聖と言つて要が盡きる、然し文化恢弘には、しばらく桁が違ふから、今は主として文化種目中の最大歸結たる宗教にのみ就て言はう。

道德や藝術は、自然大宗教構成の中に伴つて現はれて來るから、最後の結着たる宗教文化を吟味するのが早い。

日本文化の總代表たるべき宗教とは、日蓮主義である。外に類似品が少しはあるが、「黄石は珠に似たれども實にあらざ」の格で、部分的の役にはたつが、世界解決の大使命には無關係である。

日蓮主義の世界的使命は、人類を完全な國家形體の上に安定させて、アト戻りのしない絶對平和を人の世に打建てようといふのに在る。「本門戒壇」の主張がそれだ、本門の戒壇は世界の戒壇である、それを日本へ建てるといふのだ、此場合の日本は日本の私國でなく世界の公國である、その指導と歸着が法華經の大眞理たる一念三千法界圓融の妙義だといふに在る、これは殆ど日本建國當時から約束づけられて居たものである。

□日本建國の三大綱は、任運に法華經の三大秘法を豫證し

□天祖の神勅『天壤無窮』の一語は久遠實成の替ことばであり
 □國見が岡の『蜻蛉の腎帖』は、一念三千の原則たる法華經の「本末究竟等」を道破され
 □トミの岡の『靈時』は、明かに本門戒壇の豫修であつた。
 日本神記と法華經說會、神代ノ卷は提婆品と筒抜けに通ツて居るのに氣がついたら、日蓮
 聖人が日本の柱だといふことも同時に合點が出来るわけだ、「法を知り國を思ふ」が故に「正
 を立て國を安ずる」に至るのである。

以上國史の見證と法華經の教理との照應感通は、先人未だ言はざる所で、予の創唱であ
 ると共に、その全部的解説證明は、全然予の責任であるから、イヤと言へない迄に條理を
 盡して叙説したいが、今は此冊子の紙數が許さないのと、予の病體が今のところは以上頭
 を使ひ得ないから、今たゞ名目義門だけを提唱して、此講演が有つ重要性を牢記して置く。
 以上の創説を牽強の如く考へる淺識者があらば、百四五十日後の健康回復時を待て、捲
 土重來的に、佛教及び國史家者流に、一相場狂はせて見しよう。(病勞に付是にて休話、智
 大謹て筆受し奉る)

昭和九年三月十九日

昭和九年四月廿八日印刷
昭和九年五月五日發行

「朝日かげ」
〔非賣品〕



著者 田中巴之助
 東京市江戸川区一之江町
 發行者 師子王文庫
 代表 田中好一
 東京市下谷區上野櫻木町一番地
 印刷者 遠山三男
 印刷所 同
 天業民報社印刷部

發行所

東京市江戸川区
一之江町

師子王文庫
總發東京六六七番

終

